

- ▶ 勝海舟の門下生 坂本龍馬もここ専稱寺と関連が深く、頻繁に訪ねています。勝海舟との出会いは、海舟を斬りに来て、逆に弟子入りしたという話は有名ですが、同じく門下生だった杉亨二は、勝海舟が亡くなった後、追憶談で次のように語っています。  
『その頃、勝は大坂に出張してしまして、帰ってきた時、見舞に行つてどうで御座いましたと尋ねますと、ウム色々浪人などを取締つておつた所が、旅館に菰(こも)を被つて会いたいという者があるから、遇つて、己を斬りに来たかと申しますと、斬りに来たと答えたそうで、それからどうしてか懇意になつたそうですが、確か、これは坂本龍馬であつたと承りました。』  
この場所が大坂で正しければ、専稱寺、或は前記の順正寺のどちらかだと思われます。海舟の門下生になつた坂本龍馬は、文久3年2月25日に1回目の脱藩罪赦免を受け、京都の土佐藩邸にて7日間もの謹慎処分を受けますが、謹慎を終えるとすぐさま来坂し、専稱寺に寓居先を移したばかりの勝海舟を訪ねます。  
3月朔日の「海舟日記」によると『(前文省略)大坂へ船行。此日、旅宿を北溜屋町 真正寺に定む。坂下[本](坂本龍馬)、新宮(新宮馬之助)、京師より来る。』と記されています。  
坂本龍馬が乙女にあてた有名な手紙は、この時期に書かれています。  
『叔もへ 人間の一世ハがてんの行ぬハ元よりの事、うんのわるいものハふろよりいでんとして、きんたまをつめわりて死ぬるものもあり。夫とくらべてハ私などハうんがつよくなほほど死ぬるバへでいしなれず、じぶんでしふと思ふても又いさねばならん事ニなり、今にてハ日本第一の人物勝麟(麟)太郎殿という人にていになり、日々兼而思付所をせいといたしお申候。(以下省略)』[文久三年三月廿日]  
『此頃は天下意二の軍学者勝麟太郎という大先生に門人となり、この外かはいはがられて候て、先きやくぶんのよふなものになり申候。ちかきうちにハ大坂より十里あまりの地にて、兵庫という所にて、おゝきに海軍ををし候所をこしらへ、又四十間、五十間もある船をこしらへ、でしどもニも四五百人も諸方よりあつまり候事、(以下省略)』[文久三年五月十七日]  
「海舟日記」の文久3年4月16日に『龍馬、越前へ出立。村田へ一封を遣わす。』とあり、6月11日には『大和の浪士、乾十郎、大義企ての事あり。この義を塾中紀藩の者へ密告するものあり。坂本、新宮、佐藤の三子を遣わし、詰問せしむ。』と記されており、勝海舟の来坂中に龍馬の名が確認されます。  
専稱寺の勝海舟を訪れ、細かな打ち合わせがあつたものと思われます。

また、前記の『大坂より、俵次郎、半兵衛、来る。聞く、大坂の塾へ、長藩五十人程来たり、図書殿を打つ企を告げ、同志を募ると云う。龍馬子、これを説解し、敢えて同ずる者なし。』とあります。長州藩士50人ほどが、小笠原図書頭長行の襲撃を計画しており、海軍塾の塾生を誘致しようとしていましたが、坂本龍馬がこれに参加しないよう塾生たちを抑え、勝海舟不在中の大坂の塾をしっかりと守っています。



▶ 慶応4年(1868)3月13日・14日。江戸薩摩藩邸にて行われた幕府代表勝海舟と新政府代表薩摩藩西郷吉之助(後の隆盛)による江戸無血開城を決めた歴史的な会見は余りにも有名ですが、この両者が、元治元年(1864)9月11日に大坂で会見されたことも有名です。「海舟日記」によると9月9日に『陸路大坂へ帰る。』とあり、神戸から陸路で大坂の旅宿である「専稱寺」に入りました。そして9月11日に『薩人 大島吉之助(西郷吉之助)、吉井中助(幸輔)、越人 青山小三郎、来訪。云う、征長の御議紛々、決せず、関東御混雑、実に策の行わるべき無し。邦人紛擾再生せんか。如何して可ならむやと云う。今、天下危急日々相迫り、一人も実意邦家に尽す者なし。上下大抵私嘗、小節、又、嫌忌を避くるのみ。かくの如くにて如何ぞ瓦解せざらん哉云々。』とあり、西郷吉之助が当時使用の「大島吉之助」という名で、勝海舟を訪れた事が確認されます。「氷川清話」には『おれが初めて西郷に会ったのは「元治元年九月十一日」兵庫開港延期の談判委員を仰せつけられるために、おれが召されて京都に入る途中に、大阪の旅館であった。そのとき西郷はお留守居格だったが、くつわの紋のついた黒縮緬の羽織を着て、なかなか立派な風采だったよ。西郷は、兵庫開港延期のことを、よほど重大な問題だと思って、ずいぶん心配していたようだったが、しきりにおれにその処置法を聞かせよというわい。(途中省略)彼の問うに任せて、おれは幕府今日の事情をいっさい談じて聞かせた。(以下省略)』とあります。2回目の流刑を終えた薩摩藩の西郷吉之助は、元治元年3月から藩務に復帰し、藩命により上京します。西郷吉之助は事前に訪問希望を手紙に認め、勝海舟に了承を得たうえで、同年、9月11日、旅宿である専稱寺を訪れました。「海舟日記」の9月11日に『豊後殿御旅館へ参上。聞く。京都にて薩藩より建議あり、その言は防長二州は半国を以て禁裡の御物成とし、半ば征討の諸侯へ下されべし。(以下省略)』とあり、勝海舟は豊後殿(老中 阿部豊後守正外)を訪れています。西郷と勝は阿部正外の寓居先で会見した。ということも考えられなくもないのですが、西郷が事前に会う約束を取っていることから考えますと、老中の寓居先にて約束するとは考えられないので、その可能性は低いと思います。

#### ＜勝海舟と西郷吉之助の会談＞

西郷吉之助は、「蛤御門の変後の長州問題」「兵庫開港延期問題」を詰問するために訪問します。また更に、「長州の次の標的は薩摩ではないか」という幕府の腹を探るため、勝海舟を打ちたたたくつもりで乗り込んだようです。

この会見後、西郷は同藩の大久保一蔵に次のような手紙を送っています。

『勝氏へ初て面会仕り候処、実に驚き入り候ふ人物にて、最初打ち叩くつもりにて、差し越し候ところ、頓と頭を下げ申し候。どれだけか智略の有るやら知れぬ塩梅に見受け申し候。先ず英雄肌合いの人にて佐久間より事の出来候儀は一層も越し候はん。学問と見識におひては佐久間抜群の事に御座候得共、現時に臨み候ては此勝先生と、ひどくほれ申し候。』(この手紙は明治20年ごろ、吉井友実により発見)

また、「海舟余波」(巖本善治 編)では『西郷に初めて会見せられし時の事を聞きかけしにイヤ、大坂であったよ。一所に来たものは、ソウサ、誰であったか。一人ではなかった、忘れてしまった。(途中省略)何でも、大久保[利通]の方であったそうナ。此方では、少しも知らなかったが、ソナナ手紙があるということだ。』と記されています。

この会談は、お互いの人物の大きさを認め合い、「江戸城無血開城」という平和的解決を実現させるための大きな一因となるものでした。



## その他の専稱寺を訪問した人々

中央区淡路町3丁目2-13、14

### ①桂 小五郎



長州藩。後の木戸孝允。文久3年3月29日、海軍及び朝鮮問題を話しています。同年4月27日に2回目の訪問。この時は、対馬藩士 大島友之允と訪問します。対馬藩及び朝鮮問題について論じています。同年9月21日には3回目の訪問。桂は、8月18日の政変後、長州藩の勢力挽回のため海舟を頼って訪問します。

### ②松本良順



幕府侍医。文久3年3月17日、18日、6月9日に訪れています。

### ③安井九兵衛



大坂南組惣年寄。安井道卜の子孫にあたる。文久3年3月3日、4日、6月4日に訪れています。勝 海舟から砲台設置について協力を依頼されます。

### ④井上聞多



長州藩。後の井上 馨。文久3年3月28日に志道聞多という名で訪れています。摂海の警備及び対馬について話し合っています。この2ヵ月後には、伊藤俊輔らとイギリスへ留学します。

### その他

山県半蔵(長州藩 後の宍戸 環)、吉井幸輔(薩摩藩 後の吉井友実)、大島友之允(対馬藩) 青山小三郎(福井藩)、中原猶介(薩摩藩)、牛島五一郎(熊本藩)、今井 栄(久留米藩)、松平大隈守勘太郎(幕臣)、伴 鉄太郎(幕臣)

「海舟日記」には、そのほかにも多数訪問者があつたと記されており、勝 海舟の人望と多忙さが覗えます。